



1 GATHER -人との繋がり拠点-



背景・問題提起

① 福山市の現状

現在、福山駅を中心とした中心市街地では郊外への人口流失や大型商業施設の閉館によって衰退し、空地・遊休不動産などが増加し町の空洞化が起きている。また、福山市全体の人口減少と共に、高齢化率が年々増加している。これに対して、生産年齢人口（特に若者世代）が市外に流失しているため減少している。特に、福山駅周辺の三之丸町・東桜町・伏見町・元町の4つの地域の中で、伏見町に関しては人口の流入が見られず人口減少が起き、中心市街地の空洞化に拍車をかけている。

② 町での居場所

広島県福山市にある福山駅は、1日の平均乗車人数が約2万人と多くの人々が利用する為、駅周辺の人流は多い。しかし、駅周辺の流動人数が多いにもかかわらずその場所に滞在する事ができない。これは、地域の住人同士の交流の場の減少・土地の歴史や個性の消失などの地域性がないことなど、人が集まる魅力ある拠点が無いことが原因だと考える。通過するための駅周辺ではなく、滞留するための居場所が求められる。

また、新型コロナウイルスの影響により従来の職場・学校と自宅を行き来する生活様式と変わり、リモートワークやオンライン学習など場所にとらわれず活動できるようになった。その為、自宅と職場・学校に加えて新しい生活様式になったことで、異なる年代の人との関わりが少なくなると考える。その改善のためには、自宅と職場・学校以外の第三の居場所が必要と考える。

③ 都市の二重構造化

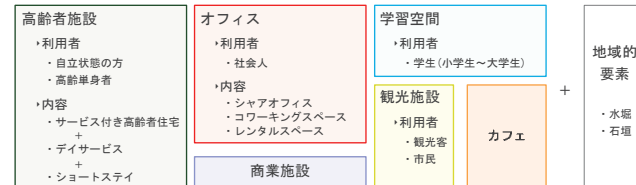
都市の二重構造化により中心市街地から郊外に商業施設や高齢者施設などが流出している。そこで、地域再生を目的とし郊外に流出した施設である高齢者施設と商業施設を計画地に設ける。高齢者施設を再び中心市街地に設けることで、幅広い年代の人との関わりをもち、都市的な刺激のある生活を送ることが出来る場所になる。

計画目的

少子高齢化や新しい生活様式などにより、異なる年代の人との関わりが少なくなる。そこで、地域再生・少子高齢化・新しい居場所づくりの3つのテーマを元に、計画地に高齢者施設と幅広い年代の人が交流出来る「第三の居場所」となる空間を提案する。

計画方針

そこで、「第三の居場所となる拠点づくりと共に、高齢者の為の複合施設」を計画する。大まかな内部機能は、高齢者施設・オフィス・学習空間・観光施設・カフェ・商業施設の6つとし、計画地にある地域的要素である水堀と石垣を取り入れ考える。



選定敷地

今回敷地として選定したのは、広島県福山市伏見町である。福山駅などの公共交通機関との距離が近く幅広い年代の人が利用しやすいが、空き店舗が多く、駅に近いという立地場所が活用されていない。また、福山城の城郭内にあり江戸時代には福山内港と福山城外堀を繋ぐ入り川があり、物産・販売が行われる商業の中心エリアであった。

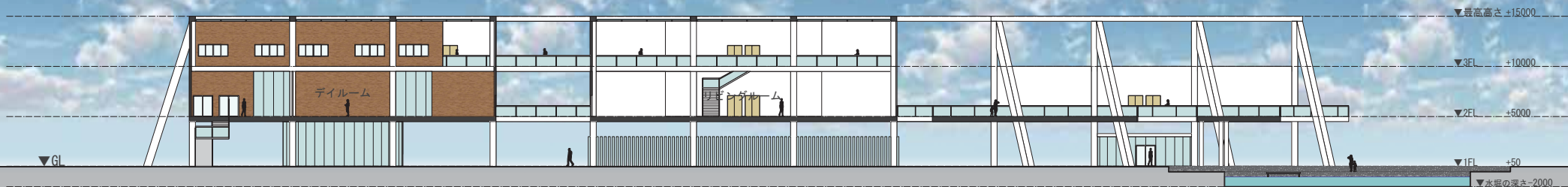


建築概要

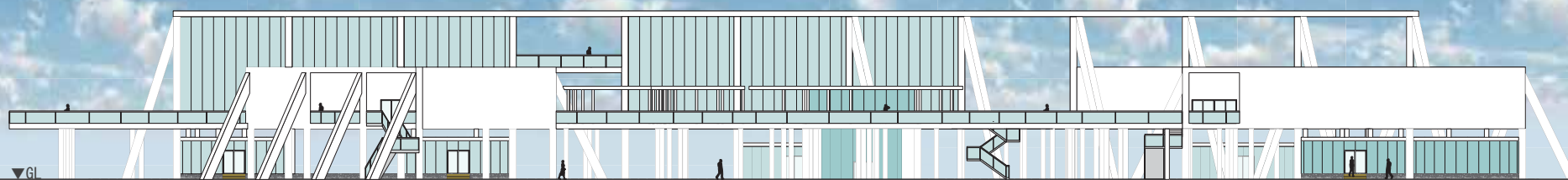
建築概要は以下の通りである。

- 敷地には、元々あった福山城の水堀を活用し、堀以外の土地部分に建物を配置する。一つの大きな建物の一部を、水堀の部分のみ削り取るイメージである。
- 建物と水上部分には、デッキを設け其々水堀と石垣の要素を取り入れる。水上部分は水特有の柔らかな形状とし、建物部分は斜め柱などを設けることで石垣の歴史を継承したイメージの表現とする。
- 建物は人の視線が通りやすく開放的にする為に、1階部分をピロティとし、一部商業施設や人が滞在出来る場所を設ける。主に、2階部分に内部機能を設け、高齢者施設のみ一部3階建てである。
- 3棟に別れた建物は、2階部分に設けたデッキで其々繋がり、2階部分から直接行き来することが出来る。また、部分的に日陰になる場所や人が滞在出来るスペースを設ける。
- 水堀は、外部の侵入を防ぐという本来の機能を現代的に置き換えて、親水空間とし人が集まる場所として利用する。その土地にあった水堀を設けることで、その地域の個性・歴史を生かしたシンボルとして利用する。水堀の周囲には人が歩行出来る場所があるのと、水上部分にもカフェなどが滞在出来る空間を設けている。

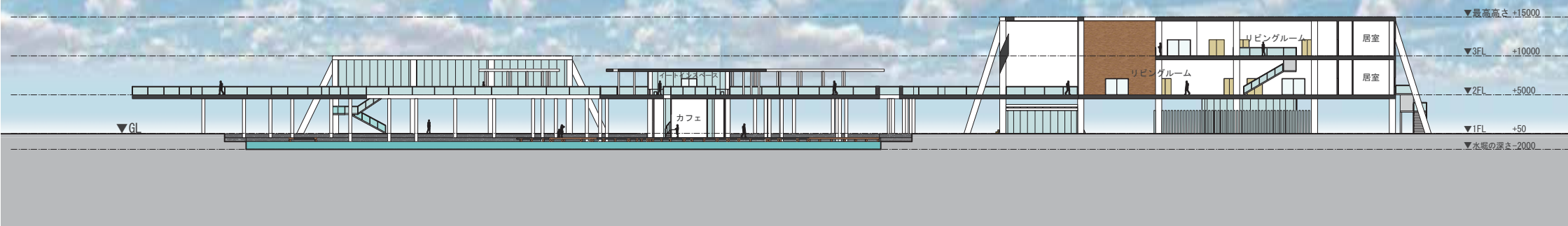




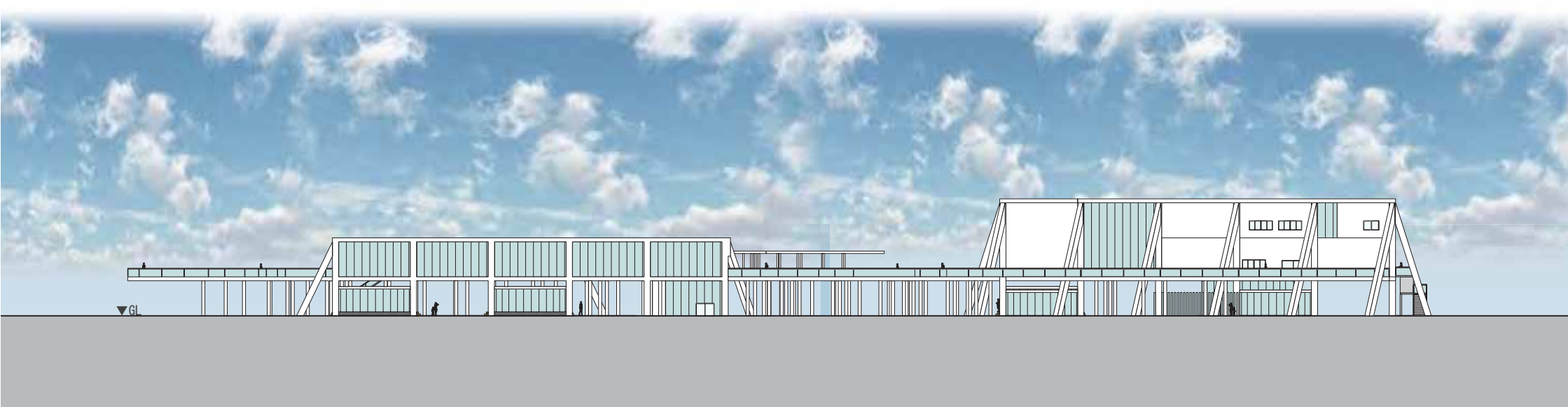
A-A 断面図 (S=1/200)



東立面図 (S=1/200)



B-B 断面図 (S=1/240)



南立面図 (S=1/240)

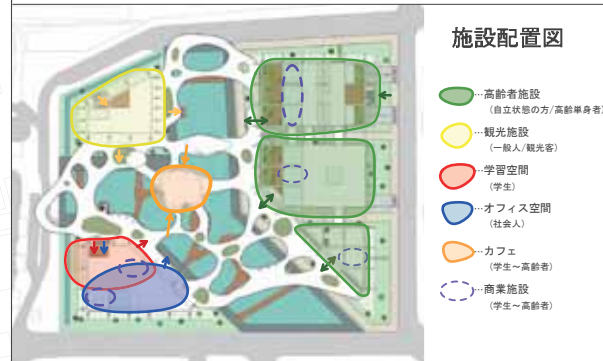


水堀

計画地の地域再生を目的に、この土地に元々あった歴史的要素である水堀を再利用する。水堀に面している部分は、堀と対比的に水の柔らかさや流動性を表現する為、直線的ではなく曲線的な要素で空間を構成する。堀の水は、浄化装置により水質を確保する。

石垣 (建物基壇部分)

歴史的要素の石垣を現代的に置き換え建物基壇として再利用する。水堀部分と対比的に石垣特有の土台としての接地性と硬さを表現する為、曲線的な要素ではなく直線的な要素としフレーム主体の構造で空間を構成する。



福山駅



1階平面図 (S=1/500)



商業施設

1階ピロティ部分は、部分的に商業施設が設けられている。外観は曲線的な形で作られ、壁をガラス壁にすることで、敷地奥まで人の視線を通りやすくしている。人は人がいる場所に多くの人が集まるため、建物の内外にいる人の動きをより分かりやすくする事で、人が集まる場所となる。

商業施設の一部店舗は、テーマである地域再生を行う為に石垣を利用した造りとして、店舗の高さを変えている。高さを変える事で、ただの単調な空間ではなく視線が上下に動くなど変化のある空間とする。また、一階部分がピロティとなっており、全体的に落ち着いた空間となっている為、商業施設そのものが辺りを照らす光源としての役割を果たす。



ピロティ

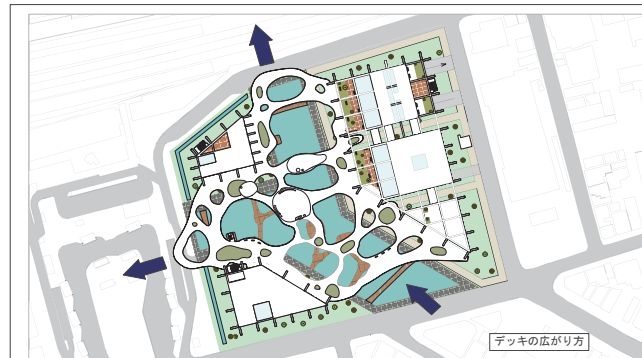
建物の1階部分は、敷地の奥まで人の視線を通りやすくする為ピロティとなっており、その空間に商業施設と人が滞在出来るデッキ部分を設けている。全体的に壁などは、ガラス壁となっており、施設などがあっても視界が通りやすくなっている。



福山駅



2階平面図 (S=1/500)



デッキ

2階部分にある各建物を繋いでいるデッキは、堀の水との連続性を考慮して水面の表現として、曲線的な要素で全体的に柔らかな空間としている。デッキには、部分的に植栽や日陰となる場所があり、歩行空間だけではなく人が滞留する事が出来る空間を設けている。また、この計画地である伏見町は、福山内港と福山城外堀を繋ぐ入り川があり水の出入口であったことから、水の表現であるデッキ部分を福山城の外堀に沿って周辺に広がっていくイメージで形作られる。水の広がりイメージしているため、部分的にデッキ部分が敷地からあふれ出しているような形状としている。



カフェ

デッキ（水堀）の中心部分には、様々な世代の人が利用する2階建てのカフェを設けおり、水堀の中心に人が集まることを目的とする。カフェは、年代を問わずに多くの人が様々な目的で利用する場所であり、敷地中央に設けることで幅広い年代の人が敷地中心に集まり、第三の居場所となる。また、2階デッキ部分からでも利用が可能である。

1階部分は主に販売場所として利用し、通勤・通学など気軽に立ちよっていただくことを目的とする。2階部分には、イートインスペースを設けており、提供場所を囲うようにして設けている螺旋階段を上がり利用することが出来る。イートインスペースには主にカウンター席が設けてあり、一人から複数人など幅広い利用人数に対応出来る。

学習空間・オフィス空間・観光施設

敷地南西にある二階部分に、学生などが自由に利用出来る学習空間と社会人の方などが利用するオフィス空間を設けている。学校の帰りに通学や休日などに、一人でも友人同士でも利用可能な学習空間を設けることで、学生などの駅前での滞在空間を新たに設けることを目的としている。

学生のための自宅と、学校以外の第三の居場所となる空間が、公共交通機関の近くに出来ることで学校の帰りに様々な場面において利用しやすい場所になると考える。また、新型コロナウイルスの影響で新しい生活様式が主流となりリモートワークなど様々な場所で仕事出来る為、自宅と職場以外にも気分転換など自由に利用出来るオフィス空間を設け社会人の方の第三の居場所をつくることを目的としている。

学生が利用する空間と社会人などが利用する空間が一つの大きな空間に設けられている為、普段日常生活では関わりがない年代の人の交流が持てる空間となる。会話することだけが交流ではなく、同じ空間で過ごすのも一つの交流だと考える。



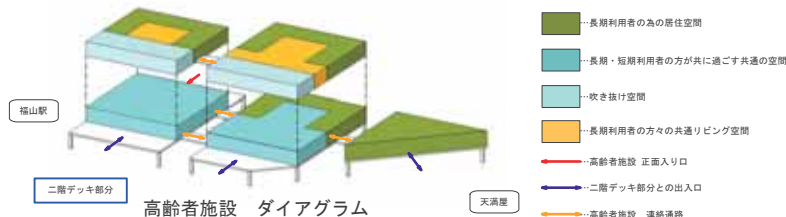
福山駅



高齢者施設

一つの建物を3棟に分割し、短期・長期利用者の共通空間と、長期利用者の為の居住空間を分けて計画している。長期利用者の居住空間には共通のリビング空間があり、多くの人が集まる場所を設けることで人との関わりを増やすことを目的とする。この共通のリビング空間は、長期・短期利用者が共に過ごせる空間と長期利用者の方々が利用出来る空間の二種類設けている。

また、共通のリビング空間からは施設専用の屋外庭園を利用することができ、2階デッキ部分と一部分が繋がっている為、そのまま2階のデッキエリアに移動することが出来る。この屋外庭園以外にも、2階デッキの一部分や1階部分など公園として利用出来る為、散歩をするなど施設で過ごす以外の自分にとって過ごしやすい場所に滞在出来る。と考える。





9

GATHER

-人との繋がり拠点-